持続可能な社会の構築を目指して

実施担当者
京都教育大学附属京都小中学校
教諭　野ヶ山　康弘
教諭　國原　信太郎

１　はじめに

これからの社会は，新しい知識，情報，技術が，政治・経済・文化をはじめとするあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤化が進んでいる。さらに，交通手段の発達や情報化が進む中で，国際交流が進展し，国際的な相互依存関係はますます深まっている。

このような状況の下で，あらゆる領域において，世界的規模で競争が激化し，その結果，種々の摩擦が生じる結果となっている。また，地球環境問題，エネルギー問題，人口問題，難民問題など地球規模の問題が深刻化しつつあり，これらの問題の解決に当たっては，国際的な協調が不可欠となっている。こうした国際関係の緊密化や複雑化などを背景にして，国際化はさらに進展し，今後ますます加速していくものと思われる。

このように国際化が急速に進展する中で，絶えず国際社会に生きているという広い視野を持つとともに，国を越えて相互に理解し合うことは，ますます重要な課題となりつつある。

そこで，７年生の総合的な学習の時間では，アイディアなどの知識そのものや人材を巡る国際競争がどんどん過熱し，産業構造の変化も急速に進んでいるこの社会において，その競争の中を生き抜いていくために，答えのない課題を試行錯誤しながら考えていくことで，課題解決に必要な資質・能力を育むことを目指した。

具体的には，本校が現在先進的に総合的な学習の時間を活用して取り組んでいるエネルギー教育を大きな柱として，エネルギー自給率，エネルギー資源，再生可能エネルギー，原子力，福島の復興，環境問題等，日本が抱えるエネルギー問題についての探究活動を行った。また，その学習成果を発揮する場として，福島合宿を企画し，実施した。

そこでは，日本が抱える問題や課題にリアルに向き合うことができ，福島の復興や日本が抱えるエネルギー問題について自分事としてとらえることができた。

２　福島の地方紙を使った探究活動

持続可能な社会の構築を目指して、エネルギー自給率，エネルギー資源，再生可能エネルギー，原子力，福島の復興，環境問題等，福島県の震災復興を入り口に，日本が抱えるエネルギー問題に目を向けるところからスタートした。科学者などの専門家やさまざまな立場の人たちとの対話を通して知識を高め、被災地視察を通して考えを深めていくことができた。

この学びが被災地である福島視察での学びの土台とすることができた。

３　福島合宿

３－１　福島合宿１日目の学習活動

まず，東日本大震災・原子力災害伝承館を見学した。ここでは，原発事故・震災の恐ろしさをリアルに感じることができた。東京電力の社員から原発事故を引き起こしてしまった責任についての話を聞くことで，現在も復興に力を尽くしている東京電力の取り組みについて知ることができた。

次の見学先である葉町産業交流センターでは，復興の課題や福島産業の現状について学習することができた。取り組みとして，作物と電気をシェアする「ソーラーシェアリング」を行ったり，カボチャや大豆を栽培するなど再エネに関する勉強会をひらいたり，新たに実験を行ったりするなど，新しい挑戦を始めていることを学ぶことができた。

１日目の活動では，震災や原発事故の恐ろしさを実際に様々なものを見たり，聞いたりすることで学習することができた。あわせて，復興に向けての取り組みや産業の様子を詳しくしることができた。生徒達は，「京都に住んでいるから自分たちは関係ない」という考えではなく，「自分たちは，福島原発事故に対して何を学び，何をすることができるのか」，「もし京都に原子力発電所ができたり，原発事故の影響を受けたりしたらどうするのだろうか」というようなことを考えていた。

３－２　福島合宿２日目の学習活動

２日目は，双葉駅には地震発生時刻のまま止まっているからくり時計や，消防署のこじ開けられたシャッターを見学し，さらに，請戸小学校の倒壊した校舎を見学することで，震災のリアルを体感することができた。大平山霊園では，津波で亡くなった方々の慰霊碑を見て，改めて地震・津波の恐ろしさを実感することができ，生徒達は「当時，どんな選択をすれば良かったのか」，「震災前，どんな対策をすればより多くの命を救えたのか」といったようなことを考えていた。

福島水素研究エネルギー研究フィールドの見学では，再生可能エネルギーを利用した水素製造について学ぶことができた。この施設見学を通して，生徒達は，「再生可能エネルギーをどう活用していけば自分たちの未来はより良くなるのか」，「どうすればこの施設のようにＣｏ２をはじめとした地球温暖化につながる物質を排出しないですむのか」というようなことを考えた。

３－３　福島合宿３日目の学習活動

ハッピーロードネットの理事長に話を伺うことができた。桜プロジェクトや，清掃活動といった地元の方々の取り組みを教えていただくことで，決して楽とはいえない復興活動のなかで，前向きに活動を続けている福島の方々の姿勢を感じることができた。このような姿は，リアルに接することが無ければ知ることができなかったことであり，ネットやメディアだけで学習していた本校の生徒達は，素直に感動していた。また，地元に方々との対話を通し，生徒達は，自分たちができることを積極的に探し，実行していきたいという考えへと至った。

４　研究協議会での発表

本年度、７年生の総合的な学習の時間では、今日的な課題である「エネルギー問題」について探究活動に取り組み、福島県の被災地訪問や現地の高校生との交流などを通して学びを深め、解決困難な今日的な課題と向き合い、解決へ向けて考えを深めてきました。

その成果を本年度の教育実践研究協議会おいて、新型コロナウイルスの感染課題に伴い、オンライン開催となりましたが、３日間で延べ３００名を超える教育関係者の方々の参加の前で、代表生徒たちが発表を行った。

５　まとめ

エネルギー問題をはじめとした現代社会が抱える諸課題に対し，まずはネットやメディアの情報から主体的に情報を収集し，自分の意見や考えと，他者の意見や考えを比較しながら論理的に思考，分析していく活動を自分たちが住む京都で行った。しかし，ネットやメディアの情報からでは伝わらないようなことを，福島合宿を通して知り，学ぶことができた。

このような一連の学習活動を通して，生徒達は，最初は余り関心が無かったエネルギー問題や，福島の復興の問題に関しての興味や関心を，徐々に萌芽させていき，それらの課題や問題について真剣に取り組んでいくことで，自分事としてとらえることができるようになった。また，これらの学習を進めていく上で生じた疑問や課題に対し，各教科で育まれた知識や技能を働かしながら協働的に解決しようと試みる姿を見ていると，福島合宿を取り入れた本年度の学習のカリキュラムは，

各教科で育まれた知識・技能の定着と思考力・判断力・表現力をはじめとした資質・能力育成の両面において有効であったと考えられる。

謝　辞

本実践は、公益財団法人中谷医工計測技術振興財団の助成を受けて行われた。

参考文献

野ヶ山康弘、河合 晋司、竹間 光宏、國原 信太郎、垂井 由博、谷口 匡、谷口 和成、岡本 幹、野原 大輝、「持続可能な社会の構築を目指して～附属間異校種連携による１２年間の学びの連続性（試案）～」、令和３年度日本教育大学協会研究集会（２０２１）

以上